

「人文科学とコンピュータ」をとりまく状況と将来展望

関野 樹[†]

人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん 2012）に連動して開催された有志企画セッション「アンカンファレンス・じんもんこん/CHの将来を考える」での話題を中心に、「人文科学とコンピュータ」の将来展望を描く上で課題を整理する。

Issues and Prospect of “Computers and Humanities”

TATSUKI SEKINO[†]

“Unconference – Considering feature of JINMONKOM/CH” was held after Computers and Humanities Symposium (JINMONKOM 2012). This report tries to sort feature issues about the discipline of “Computers and Humanities” based on discussion of the unconference.

2012年11月17～18日に北海道大学（札幌市）で開催された人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん 2012）の終了後、有志の企画セッションとして「アンカンファレンス・じんもんこん/CHの将来を考える」が開催された。この企画セッションには16名の参加者が出席し、それぞれ人文科学とコンピュータ研究会（以下、研究会）について意見を述べていただいた。本稿はこの企画セッションでの議論をもとに、研究会の役割や課題を整理し、今後の活動を考える材料にしようとするものである。なお、本稿はあくまでも当該セッションの企画者の一人である著者の文責においてまとめたものであり、必ずしもセッションの参加者の総意とは限らないことをあらかじめお断りしておく。

1. 状況

企画セッションでは、討論に先立って研究会を取り巻く状況について説明があった。本稿でもまずこの点を踏まえてから次の議論に移りたい。

研究会にとっても最も喫緊の課題は会員（研究会登録者数）の減少である。2012年11月の時点で研究会の登録者数は約230人であり、ここ数年は毎年10名程度のペースで単調減少が続いている。会員減少の原因をここで掘り下げることがはしないが、会員減少に伴って生じる問題点を整理しておく必要はあろう。

まずは財政面である。現在年4回開催している定例の研究会の開催には会場費や印刷費などの一定の経費が必要である。また、学会事務局が担っている会員管理などの事務経費や電子図書館の維持経費も会員による登録費の一部が充てられている。会員数が減少すれば当然会員一人当たり

の負担は大きくなり、登録費は上昇する。さらに研究会の活動そのものへの影響に目を向けると、研究会の運営（運営委員会や幹事）、シンポジウムで行っている論文の査読に支障をきたすこと、研究会の学問的な多様性が失われることも大きな痛手である（詳細は後述）。

会員減少への対応を考えるときにまず考えるべきなのが「会員にとってのメリット」である。現在研究会の会員が享受するサービスは、定例の研究会の参加費が無料となること、電子図書館（情報学広場）に登録されている研究会の研究報告が過去のものも含めて無料で購読できることの2点である。以前は研究会に出席しなくても研究報告の冊子体が郵送されてきたが、研究報告が電子化されて以来このサービスは廃止されている。もちろん、電子図書館に自らアクセスすれば研究報告は閲覧できるものの、実際に手に取ることでできる冊子体がなくなったことで、研究報告の購読費という意識で登録費を支払っていた会員にはメリットを実感しにくくなっていることは否めない。

企画セッションではこれらの状況を踏まえながら、「会員にとってのメリット」は何なのか、言い換えれば上記のサービス以外に研究会に個々の会員が何を期待しているのか、研究会の場を何にどのように使うと自身の研究成果につながるのかといった点を中心に参加者全員に意見を述べていただいた。

2. 「人文科学とコンピュータ」

企画セッションの中でも、

> 「人文情報学」がどうするかと、その中でCH研究会が何をやるかは分けて考えるべき。

との意見があったとおり、まずは「人文科学とコンピュータ」が扱う学問領域についてその目的や特徴を整理してみる。最近では「人文情報学」という呼び方も使われるように

[†] 総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

なっているが、ここでは「人文情報学」も含めて研究会がこれまで扱ってきた幅広い領域を対象とする。

研究会のホームページ[1]では研究会の対象を人文科学分野へのコンピュータ応用をめざした

1. ハード・ソフトの開発・事例
2. 研究手法（処理技術）の開発・事例
3. 学際的研究や理論的研究

としている。過去の発表を見てみると、人文科学の材料や課題に対して情報技術をどのように応用するのか、反対に、人文科学の課題や材料を使って情報技術をどのように磨くのかといった具体的な事例に基づくものが多い。さらに、

> 共通の言語・フレームワークをどのように作るかに情報が一定の役割を果たす

との意見があった。これは、情報技術が人文科学の眼前の課題を解決するだけでなく、その手法や考え方を人文科学の別の課題や材料に応用できる可能性を示唆している。つまり、人文科学と情報技術による文・理の連携だけでなく、情報をのりしろにした文・文の連携も含めた学問領域を形作っていると考えられる。

「人文科学とコンピュータ」が人文科学の様々な分野に適応できる可能性を持つ一方で、それに伴う課題もある。材料や分野が多様化・細分化し、研究内容が深化するにつれて、研究成果を相互に応用しようとすればそれらについての詳しい知識が必要になってくる。結果として、それぞれの材料、分野ごと違いを超えた情報共有や議論の仕組みが必要になってくる。また、

- > サイエンスとしての人文情報学のためという研究が少ない。人文情報学という分野の確立が必要。
- > 情報工学の人はいるけど、情報科学の人がいない。理論がなくて、あさってのことをやってしまうことも。

といった意見も聞かれた。同様にこの分野全体を網羅する唯一の教科書ともいえる『講座 人文科学研究のための情報処理』でもその冒頭で道具に振り回されることの危険性について警鐘を鳴らしている[2]。これまで個別の事例については多くの研究が蓄積されており、それぞれの興味や視点に基づいて技術や手法の応用、分野同士の連携が図られてきた。情報をのりしろにしながらかこれを発展させて学問領域全体にふくらみを持たせてゆくためには、もう一段上からの理論的な裏付けや体系的な仕組みが必要になってきているのかもしれない。

3. 研究会の役割

企画セッションでは研究会の役割として「研究発表の場」と「交流の場」について多くの意見が出された。ここではこの2点を中心に研究会の役割について考えてみる。

(1) 研究発表の場として

研究会では年4回の定例の研究会と年1回のシンポジウムで毎年80件程度の研究発表がある。企画セッションの参加者からは「人文科学とコンピュータ」の枠内で発表することについて以下のメリットが語られた。

- > ユーザ、純粋に人文系のユーザの声を聴くため。
- > 技術的に突っ込んだ議論はここでしている。

情報工学の立場からは自分の作ったシステムが人文系のユーザにどう見えるのか、また身近に情報技術に明るい人がいないので技術的な見地からの意見が欲しいといった意見であり、自分とは違う立場からのコメントや議論への期待がうかがえる。その一方で自身の専門に近い立場からの専門的なコメントが欲しいといった意見は聞かれなかった。また、

- > 人文学の中にも、情報技術に対して寛容な分野と厳しい分野とがある。厳しい分野ではCHが唯一の発表の場になっている。
- > 他のSIGではCHのような漠としたものを扱えないので、CHで発表している。
- > オープンで間口が広い。
- > 実験的なことができる。

といった他場所では受け入れにくい発表をCH研究会で発表するといった意見もあった。一見すると研究会のレベルが高くないから、ということにもなりかねないが、見方を変えれば、何でも自由に議論ができる場として研究会が使われていると考えることもできる。この点について、

- > 「じんもんこん」へのアプライは緩い。逆にそれがうまく機能している。
- > 今の査読のレベル（返ってくるコメントも含めて）は適切であり、査読はやめるべきではない。

といった査読や研究の質についての意見もあり、必ずしもレベルの高低だけで発表の場が選ばれているわけではない。研究会が自由な発想で議論できる場として機能しているといこと、一方で一定の研究の質を保つことや自身の弱い点（人文科学の研究者にとっての情報技術の議論、もしくはその反対）からのコメントを得られるという点で査読の仕組みがうまく機能していることがうかがえる。

(2) 交流の場として

分野を超えた交流の場として研究会をとらえる意見も多く聞かれた。たとえば、

- > ぜんぜん違う人が来ているのがメリット。
- > 研究会では、さまざまな人と自由に話ができる。
- > 自身の職場が特定の専門に特化しているので、ほかの人文系研究者がどのように考えているか知れた

い。

といったものである。さらに交流の結果として、

- > 科研費などの共同研究者を求める場として有用。
- > 人文系の人たちが、情報工学を学ぶ場になる。
- > 人文科学と情報工学との交流に関する議論の場としても有益。
- > データベースを作る側とそれを使って分析する側の交流の場としての重要。
- > 技術的なヒントを得る。

など、実際の研究に直結するメリットに関する意見も多かった。それぞれの専門に特化した研究組織で専門的な議論や交流が進められる一方、分野間の交流を行う貴重な場として CH 研究会が活用されていることがうかがえる。このようなニーズを反映するように、

- > 人文科学者がもっと入ってくる必要がある。
- > 人文科学に対していかに効力を発揮できるかが試金石。

といった、人文科学のさらなる関与を期待する声があった。その一方で、

- > 情報工学の人が少ないわけではないが、情報工学の中では狭い。
- > 情報系が減ったなど感じている。
- > 情報系の人たちへのメリットをどのように見せるかが難しい。

といった、情報系の研究者の参加やそれらへのアピールといったことを指摘する声も多かった。いずれにせよ、人文科学と情報工学のより密接かつ多様な連携が求められていると考えられる。

4. まとめ

ここで、企画セッションで出された意見をまとめながら研究会の役割やその方向性について整理する。

(1) 分野間の交流—多様な材料と手法

CH 研究会は、自身の専門を掘り下げるよりも異なる専門や異なる立場（データベースやツールの製作者とユーザの関係など）の研究事例や意見を集める交流の場として期待されている。先述のように「人文科学とコンピュータ」が対象とする研究領域がますます広がり、個々の分野では専門化が進んでいる。それに合わせるように様々な研究組織が立ち上がっており、専門的な議論はそれらの研究組織で行われている。これに対し、CH 研究会の役割はそれぞれの研究領域をつなぐハブとして位置づけられると考えられる。CH の第 1 回研究会（1989 年 5 月）の研究報告の中で、研究会の創設者の一人である杉田先生は、学会をいろ

いろな対象をカバーする総合百貨店に例えている[3]。分野を超えた交流が会員のメリットになっているという点は研究会の創設時から一貫しているようである。

研究会がこのような役割を担うためには研究組織間の連携に加えて会員の多様性の維持が必要である。会員減少は財政などの表層的な面だけでなく研究会の根幹にかかる問題であるということを変更して認識させられる。

(2) 自由な発想の醸成

研究会の特筆すべきもう一つの特徴として、専門にとらわれない自由な研究が許容されているということがある。もちろん、学術的な手順をきちんと踏んでいることは前提ではあるが、何でも試してみるというおもしろさとそれに対して様々な立場からのコメントが得られるというのが本研究会の一面でもある。これを生かし、多様な研究課題、材料、手法が交錯する中から見出された研究のシーズを育み、萌芽的な研究の発信源として研究会が活用されることも期待される。

5. 今後の課題と施策

企画セッションでは、研究会の今後についても具体的な方策が多く提案された。研究会の役割も踏まえながらこれらの方策について考えてみる。

まず数多く提案があったのが他の研究組織との連携である。これは、分野間の交流を進める上で今後積極的に推進すべき事項であろう。具体的な連携先としては以下のような提案があった。

- > 人工知能学会との連携はどうか。
- > JADH（日本デジタル・ヒューマニティーズ学会）との共催。
- > SIG-DB との連携は考えられる。

また、連携内容に踏み込んだ提案として、

- > CH に関わっている人がもっと自分の学界に戻って宣伝をしていく必要がある。
- > 別の研究会に CH の会員を呼んでもらう。

といった組織間の交流について、さらに、

- > 人文科学の人にもっと来てもらうためにはワークショップや、講習会などをやるといいのかもしれない。
- > 会場となった研究機関の人に話をしてもらう機会はあるが、逆に、その研究機関の人に聞いてもらうための話をするという発想もあるのでは。
- > こちらから出向いて求めてられている内容を話すことも考えられる。
- > 過去に全国を巡回したことは掘り起こしという点で意味があった。

といった、新たな研究領域や研究者を獲得してゆくための具体的な提案もあった。この他、課題としては、

＞ 学際領域で学んだ学生がアカデミックポストをとるためにどうするか。

＞ 国内だけでなく国際的な交流はどうするのか。

などの指摘があった。また、今回の企画セッションでは話が出なかったが、学術誌に相当するものが作れないかといった要望や「デジタル・アーカイブ」のようなよりしろとなるようなテーマもしくは大型の研究プロジェクトのようなものがあるのではないかといった意見も以前から少なからずある。いずれにせよ、この手の議論にありがちな「組織をどうやって維持するか」という受け身の話に終始するのではなく、「自身の研究のために組織をどのように使いたいのか」といった積極的な考えに立った施策を期待したい。

謝辞 活発なご意見、討論を展開していただいた企画セッション「アンカンファレンス・じんもんこん/CHの将来を考える」の参加者ならびに企画に携わった研究会スタッフおよびプログラム委員長の永崎研宣氏に御礼申し上げます。また、会場の手配や準備に奔走していただいた北海道大学の兎内勇津流、小野芳彦、林寺正俊の各氏に謹んで感謝の意を申し上げます。

参考文献

- 1) 人文科学とコンピュータ研究会
<http://www.jinmoncom.jp>
- 2) 及川昭文: 講座 人文科学研究のための情報処理, 第1巻 入門編, はじめに, 尚学社 (1998).
- 3) 杉田繁治: 人文科学とコンピュータ, 情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ (CH), 1989(43(1989-CH-001)), 1-8 (1989).